郷土のとびら

季刊

直方市立図書館 NOGATA CITY LIBRARY

2021 年 7 月発行　第 23 号

直方市の鉄工業　直方鉄工協同組合

大正 10 年工場法に基づき直方鉄工業組合が発足しました。第一次世界大戦の好景気に直方の鉄工業は活況となりましたが、その後の世界恐慌で不況に見舞われ、工場数、生産額は減少を続けます。やがて日本は満州事変をきっかけに第二次世界大戦へと進んでいきます。直方鉄工業は、炭鉱から軍需へと需要を伸ばし、昭和 10 年に直方機械工業組合が発足、昭和 14 年には直方技術員養成所を開設し、工員の技術の向上を目指します。昭和 15 年には直方鉱機工業組合が発足し、満州に工場を建設します。七つの工場が商工省指定工場、23 工場が福岡市商工局指定工場になるなど昭和 17 年には直方の鉄工所は 164、工員は 3600 人と空前の盛況となります。人手不足のため花柳界や商店からも勤労動員され、工場に送り込まれました。昭和 18 年に直方鉱機工業施設組合が発足しますが、敗戦を迎え、商工協同組合法により昭和 22 年に直方鉱機工業協同組合となります。

その後石炭合理化政策により炭鉱が閉山となり、直方の鉄工業は打撃を受ける中、昭和 28 年に直方鉱機工業協同組合は直方鉄工業協同組合と名称変更し、石炭機器製造から一般産業機器製造へ切り替えを図ります。

直方の鉄工業は、明治から昭和にかけて石炭鉱業を背景に製鉄、軍需工場と各時代の中心となる鉄工機器を生産してきました。炭鉱と合わせて鉄工業も日本を支えてきたと言えます。

「直方鐵工界の歩み　直方鉄工協同組合 80 年史-」 N560 ノ

筑豊の民話 -英彦山の神木-

豊臣秀吉が朝鮮出兵の際、船の材料を得るため英彦山の十抱えもある楠を切ることになった。ところが英彦山の多くの僧は「この楠は釈尊入寂の後、豊前坊の天狗がインドから飛来したおり、羽根を休めた由緒ある木なので切ることはやめてほしい」と反対した。秀吉の命を受けて英彦山に来ていた小早川隆景は、これを聞き大いに怒ったため、60 人余りのきこり達は否応なくこの神木に鋸の歯を入れた。

その瞬間、にわかに空が曇ったと思う間もなく、大地をゆるがす大暴風雨となった。風は山の木々にうなりを投げつけ、木々はあまりの強風に悲鳴をあげた。雨の大地にきこり達がひれ伏していたそのとき、定かでない視界に山伏の格好をした天狗の姿が浮かび上がった。

「何が故に由緒ある楠を切るなど非情な行いをするのじゃ。早々に山を下るがよい。」

そこに居合わせた人々は、形容しがたい慄きを感じたが、隆景は少しも騒がなかった。

「これは私事のためあらず、天下国家のために行うことなれば責められる筋にあらじ」

「なれど神体の触れしものなれば、恐れ多しと思わずや」

「さりながら火急の事とて他にあてもなく、先ほどの言葉通り国家安泰の為なれば速やかに嵐を静め給え」

天狗の影はこの言葉を聞くとやがて小さくなり、雨の中に消えていった。ほどなく天気は回復しきこり達も安心して楠を切り出した。総じて英彦山の樹木は神のものとしてみだりに切ることが戒められていた。

（田川郡川崎町）

「ふるさと筑豊 -民話と史実を探る-」　N388 チ

直方鉄工場から身を興した　金本福松

明治 26 年、父親が直方市に鉄工所を企業。父死亡のため、13 歳で異母兄の製かん工場で徒弟として働きます。明治 41 年、16 歳で酸素溶接の新技術を習うため、フランス人の技師のいる大阪のオキシレーヌ・アセチレーヌ会社の門を叩きます。。そこで雑役夫として働きながら、休日を返上して溶接技術の腕を磨きました。やがてその熱意が認められ、フランス人技師から溶接技術を伝授されると、明治 44 年直方に帰り、大正 2 年有楽町に金本溶接工場を開きました。大正 10 年経大鋼管の製法を発明し、やがて大正町に日本スチール管株式会社を立ち上げました。当時は大型のガス管は輸入に頼る他なく、安価な国産品の発明が待たれていました。しかし工場が発展する矢先、第一次世界大戦後の世界恐慌のあおりをうけ、1 年で倒産してしまいます。そこで再起をかけ大正 12 年に再び大阪に向かいます。技術を生かし昭和元年東洋経大鋼管製造所を設立すると、市場が次々に広がり、軍の工廠からの注文が殺到しました。生産高は年々増加し、十年足らずの間に莫大な富を築きました。

昭和 9 年、母が亡くなったのを機に 43 歳で会社を譲り、得度して金本耕三と名乗り、母の菩提を弔うために、父母の故郷である尾道市瀬戸田町に寺院造営を決意します。福松が建立した潮木山耕三寺は、現在では 15 棟もの堂塔が国の登録有形文化財に指定されており、耕三寺博物館では、重要文化財を含む美術品が展示されています。寺院の他に学校や病院の運営にも関わっています。直方の鉄工業を足掛かりに努力と熱意で成功した人物です。

「続直方歴史ものがたり」　N219 ノ
「耕三寺 HP」　http://www.kousanji.or.jp/temple.html

はじめの一歩　～郷土資料の紹介～

直方市立図書館にある郷土関係の本を紹介していきます。
郷土の歴史や文化に興味をもっていただくきっかけになればと思っています。

『「織部好み」の謎を解く　古高取の巨大窯と桃山茶陶の渡り陶工』

小山　亘：著　忘羊社　N 751 ノ

６月、高取焼古窯の内ケ磯窯の開窯年代とゆがみをもつ「織部高取」の開祖について直方市の九州桃山茶陶研究会が新たな見解を打ち出したことで話題になりました。

そんな内ケ磯窯についての本をご紹介します。

直方にはかつて「筑前焼」と呼ばれた高取焼の初代・宅間窯と、それに続いて築かれた内ケ磯窯という二つの窯が存在し、この初期の二窯で焼かれた高取焼は「古高取」と呼ばれ地元愛好者を中心に今も珍重されています。

内ケ磯窯からは、茶人・古田織部好みの歪んだ茶陶が大量に出土しましたが、そこには朝鮮渡来の技法にないはずの技術があったことから様々な通説が覆されることに…。
陶芸史の最高峰に立つ伝説の職人達の姿を浮き彫りにする一冊です。

直方市立図書館　直方市山部 301-11 ユメニティのおがた内
TEL 0949-25-2240　FAX 0949-23-3902